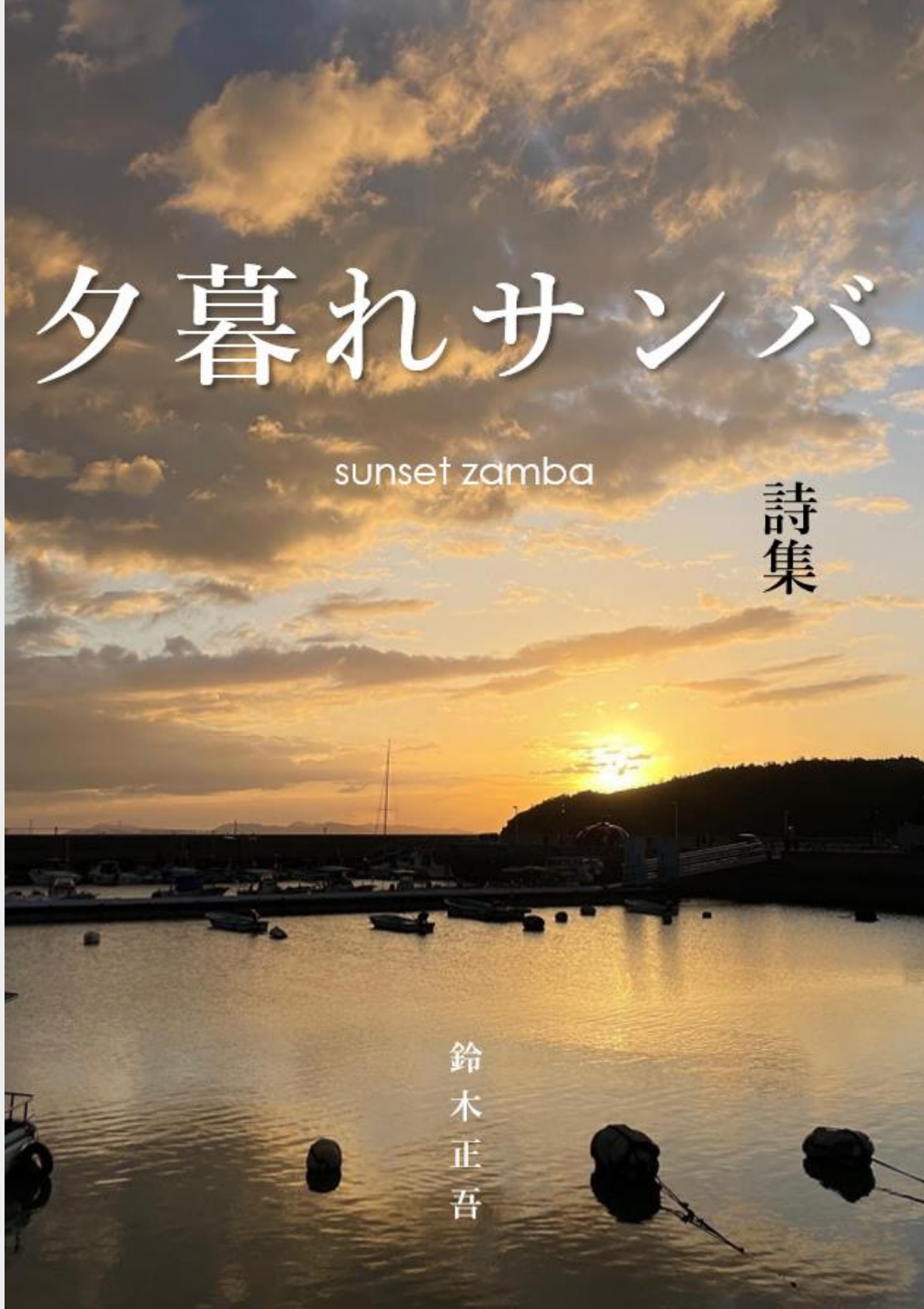


夕暮れサンバ

sunset zamba

詩集

鈴木正吾



ユウグレノシズカナサンバガナガレテル

僕を見て

もっと見て

目の前にいる僕の言葉を聞いて

確かに動いてる僕の心臓を感じて

君を見よう

もっと見よう

目の前にいる君の温度を感じよう

何かに繋がる感情を分かち合おう

Open The Door

永い冬は眠って過ごす
そんな君の話を聞いた
寝ぼけ眼の春の始まりは
誰にも内緒で咲いてるの？

閉ざしたその胸の中に
風をいっぱい吸い込んで
弾け飛ぶ夏は目前
さあ、両手を広げて

Open the door

開けたら飛び出せ 外の世界
勢い余って転んでも
濡れたって 泥んこになったって
とにかく思いっきり笑えばいい

豆腐屋のラッパと長い影
夕暮れはあの坂道へ
眠ってた冬に 声だけ聞いた
あの星空見上げてみれば？

閉じたままで増した湿度
ジメジメ悩んだ心の傷も
夜空に全部吐き出して
また、明日に向かえばいい

Wide-open the door

気持ちの風を入れ替えて
暢気に鳴いてる虫達と 寝息をたてて眠ればいい

Open The Door

起きたら飛び出せ 真ん中へ
飾るだけの昨日の続きなんて
邪魔になれば捨てればいい
とにかく今日を また進めばいい

ココロ

何もないのに逃げたり
どこにも無いのに探したり
想っても無いのに言ったり
寒いのに上着脱いだり

欲しくないのに口に運んで
褒められてないのに照れたり
心無いところから励ましたり
進まないのにクラクションならしたり

ココロがココロ

「楽」へ流れて、「多数」へ落ちる

両手で搔いてはユラユラ揺れて
バランスを無くした真つ暗な夜
空想上の飛行船 行き先は不明

肝心なことなのに静かで
自分の物じゃないと汚したり
春でもないのに飲んだり
守ってるつもりで壊したり

マクロな願望と冷たいリアル
頭に描いたパーフェクトワールドでは
思い通りに舵をとって進める

そのまま進もう現実へ
想ったままのココロで
笑って 怒って 泣いたら叫んで

ココロはココロ

願望と現実を行ったり来たり

-less (レス)

広げた口から頬張った風
噛みしめて飲み込むような

水に甘みを求めては首を傾げ
打たれる雨がヒリヒリ痛む

何気ない自然現象が驚異に変わる
抵抗力を失った鈍感な体で
僕らは地下へ地下へと潜るんだ

弾いたキーが行き先不明でさまよい続け
答えを埋めたチップが固まり、僕らも
ずっとフリーズしたままじっと待つてる

簡単な言葉だけをキャッチして
薄っぺらいところで泣き、笑い

そのずっと奥にある感覚には
もはや気づけなくなってしまった・・・

ありきたりなストーリーで落ち着いて
決まって最後にはハッピーが広がる
そんなフィクションでも気持ちは晴れるんだ

空気が美味しいと両手を広げた君が言う
足した味ばかりで胃が荒れて、僕らは
無味無臭のモノも濃厚に感じる、センスレス

僕らはもう、何も感じないんだ
感じたことを並べても
色も形もない

-less。無くなった。

ジグザグ

目の前のでっかい夕日
これから生きてゆく勇氣
強い風は最大の猛威
雨上がりの空は驚異

組み立てて壊した全部
もう一度始めるための準備
中途半端な自信は注意
追われて無くした周囲

たくさんの雨がこの地を肥やし 多すぎる知識が空を汚す

昨日の地図を開いて
再出発をかけた最後の願い
よく見りや駄作で
今までの人生をリセットしたい

振り返る余裕もなく歩いた
ジグザグ・ロード 遠回りしては続く……

座り込んで考える余裕
大きく広がり出す途中
見上げた夜空に浮かぶ模様
試行錯誤でまだ模索中

夜明け前の五里霧中
焦らずゆっくり深呼吸
浮き沈みを繰り返す浮標
右手を挙げたらそこまで突入

初めての連続が重なれば 黒くなって光り出すだろうか？

昨日までの地図は捨てて
再出発をかけて動き出した
ぐっすり眠れば軽くなって
歩くスピードも増してゆく

振り返ってみても まだ山のふもとまで
ジグザグで昇って行こう ゴール無き旅は続く……

だれかまかせ

選べるならそれでいい
選んだならそれがいい

その道を迷うことなく
全速力で走れば美しい

困難だと尻込みして動き出さない人の癖

「だれかまかせ」

結局は、自分じゃなきや、それでいい

簡単さと早とちったら

いわんこつちやない……

真夜中の抗議ファックス

だからって？止まることはない

匂いも風も感じないブラウン管から観賞する人

「だれかまかせ」

いつも、良い結果だけを求めてせんべいをかじる

だれかにまかせて

だれかにまかせて

何も、あなたじゃなくてもいいでしょ、

何も、「今」しなくてもいいでしょ、

何も、何も、あなたがそんな……

なんとか言いながら

いつまでも

「だれかまかせ」

声

叩き落とした悲しみひとつ

「二度と来るな！」

って言ってやった

拾い上げた奇蹟がこの手の
小さな手の中で光って消えた

みんな消える。

何も無くなった胸の中に響く声

「何やってんだ？」と怒鳴られる

「お前は誰だ？」と言い返し

暗黒の眠りの中へ

・・・今日が終わる

作り話で平衡を保つ暮らし

今の僕。

悲しくても 嬉しくても

声が出ない 何も見えない

あきらめたのはいつからだっただか
もう何も言わない 聞きたくもない
このまま静かに

ただ・・・

暗黒の眠りの中へ

今日が・・・

「何やってんだ？」

また何かが怒鳴る

マイルド・ヘブン

目の前で起こる景色を僕は目の中だけに留めて
頭で考えたり心で思ったりなんてしない
そうすればなんて平和で 穏やかで ゆっくりで
暖かくて ふわふわしてて カラフルなんだろう

・・・天国ってこういう所なのかもしれない

切り裂かれるように見開いた世界は
誰もが狂気で みんな僕に向かってきてて
勝手に 無造作に 僕の、そう僕の様々なものを
壊したり グルグル回したり ペチャンコにするんだ

・・・頭の中だけでマイルドなヘブン

雪だるまみたいなものさ 次から次へと
リンクでき得る全ての「最悪」は奇蹟のように
まるで起こりそうもないところから生まれて
知らない間にドンドン連鎖していく 悪い方へ

・・・そしたらヘブン、想像するのさ

簡単に出口を探して抜け出してみても
単純さ、それは新たな入り口 狂気の始まり
だからそこから逃げずに塗り替えるんだ 春色に
花を咲かせ 風を呼ぶんだ そしたら乗っかるう

・・・明日の風、マイルドなヘブンに吹く

香りのない花

海の中に咲くという
人ごみの中で埋もれるよりは
あえて酸素もなく 光も乏しい
海底でそれは

力強く 美しく

香りを持たないその花は咲いている

花粉を運ぶ虫たちを寄せ付けず
知らん顔している魚達の中で
鮮やかな色と形で その花は咲いている

子孫繁栄を放棄した美しい花
これで最後なんだと懸命に「美」を求め
外面ばかりを気にしては また衝動買い
それでも綺麗に散りたいと
海の底で揺られている

誰かが「それは《花》ではないだろ」と言った
花であることを否定された香りのない花
美しく 鮮やかな色をもつ 海底の花

ここにいることを

誰かに知らせる事は必要なのか

ここにいるんだと

主張する香りは邪魔になるだけではないか

香りを持たない花（僕）は
今日も海底で揺られている

The word

ずっと想っていた気持ちはきつと
君の中に少しずつ伝わっていて
最後の一言、僕が君に言えれば
確信に変わると思うんだ

The word is "LOVE"

僕は君が好き。

言葉で伝わらない気持ちは全部
出会ってから今までに届けた
そう、最後の言葉

君が好きだって言わなきゃ

ONE

天気予報では雨の午後に
電車に乗って君に会いに行く

まだ降ってないから手ぶらの僕と
用意周到に赤い傘を下げた君

じゃまになるけどなきや困る時がある
そんなモノを一杯持つてる君がいないと
ほんとは困り果てて途方に暮れる僕がいる

つまり、君 足す 僕の
そんな毎日の中で二人 幸せ

時々横向く八方美人な僕がいて
人見知りな君が隣で突つつく

つい大袈裟な口調で咎めあつては
肩を離して歩く駅までの帰り道

半分ずつ持ち寄って一つの空間にいるから
たまにはみ出した所を無駄に感じてしまうんだ
ほんとはもっと大きな円の中で笑いあえるのに

つまり、君 引く 僕も
僕から何か除く事もできないのに

だから、君 足す 僕で
作りだした毎日がやっぱり 幸せ

ポンコツ

ガタガタ道を
黄色いポンコツで行く。

口ずさむポップソング
軽く弾けば：
吹き出しそうな君の横顔も
太陽に光って

平凡な日曜日が特別になってゆく

大好きなフレーズが飛んじやったからって
何度も叩いては流し続けるカセットと
早起きして磨いたボンネットから照り返す陽射しが

車の中で リズミカルに とけ合っていく

追い越し、追い越され
この道をまっすぐ、海まで目指す

どこまでも続く真っ青な空の下で
伸びきったように流れてく景色を
二人だけの空間が変わらず動いていく

〈言った、言わない〉の喧嘩も
なんだか幸せ

僕らは
ずっと向こうの海まで行く
ここよりまぶしい
あの海を目指す

imaging

やわらかい朝 目覚めの良い温度
遮られる太陽が 細々僕に届く

窓の外の声 決まったTVプログラム
急ぐことも忘れた 穏やかな瞬間

白くおぼろげなイメージが
君を重ね ゆっくりと僕の中で反芻する

顔の見えない君を想い
声の届かない距離を感じる
本当の気持ちを抱え込んだまま
ヒラヒラと回転する君は笑う

水を含んだ空気 いつも通り気だるい午後
水素も酸素も水になって 道路を濡らす

取り急ぎの回答 繰り返す言い訳
閃めいた言葉で その場をしのご

重く冷たいイメージが
君を重ね 金属のように心に鳴り響く

僕の知らない街を浮かべ
そこで暮らす君を想像する
別れの言葉を思い返したまま
髪を揺らして遠ざかる君は もう振り返ることはない

かさぶた

君にキスした。

周りの雑音が消え　まるで二人だけの
心地よいリズムが　静かに流れる時間

遠くで微かに響く声。

もうかさぶたになって

綺麗に剥がれようとしてる

君の過去が・・・

なかなか僕から離れない

君にキスした。

理解したつもりで　誤解なんだと思いつむ
耳障りなきしみが　それでも僕から離れない

怪我したけど治りかけている

君の過去は醜いかさぶたになった

周りでそれを噂されると

僕の気持ちまで・・・

ほんと情けないけど揺らいでしまう

僕の中で大袈裟なイメージを作り　なかなか離れない

思い切って

かさぶたにキスした。

避けるように反らした君の過去に・・・
気持ちのまま、優しいキスをした

そしたら・・・

晩夏の唄 ―秋の始まり―

キラキラ輝きながら君は南へ

「太陽に近づける気がするから」

分かるようで分からない理由

暗いところが大嫌いな僕も

知らないうちに南へ 南へ

薄着になればその分解放される

って、

お互い意味もなく向かった島

南の島の、風の、熱の、色の

全部に魅了されて眠りこけた

夏の思い出、胸に抱いて、

・・・散る秋へ

臭いが下から昇る真夏を過ぎ

頭の上から降ってくる夏の終り

斜めから当たる陽射しも弱い

二桁になった台風が週末に襲い

かろうじて飛んだ飛行機で戻る

落ちそうで落ちない、現実へ

今、

焼けた肌がボロボロと

色づいた葉っぱの様に落ちる

散っては積もる光景の全部が

夏の思い出、胸にしまつて

・・・来る秋へ

思い出詰めた晩夏の唄

始まりに歌う終りの唄

apple on the water

水面に浮かんだリンゴを見つめる。

それだけが紛れもない現実なのに
向こうから大きな波はやってこないか
奥深くから凶暴な魚は襲ってこないか
このまま知らない所へ流されていかないか
そんな心配ばかりしては目をそらす

水面に浮かんだリンゴを見つめる。

濡れずにすむならリンゴを取って
誰にも言わずに一人で食べよう
真っ赤なリンゴが プカプカ揺れる度に
周りが気になって 見つからないか焦って
そんな心配ばかりしては諦めてしまう

水面に浮かんだリンゴを見つめる。

だんだんそれが本物のリンゴか疑いだして
だとしてもナイフがないから途方にくれて
取ってもしようがないとリンゴは忘れて
「おなかが減った、減った」と訴えている
そんな事ばかりしては いじけてる

やっぱり、

水面に浮かんだリンゴを取ろう
そして、

水面に浮かんだリンゴを食べよう
その時は、
360度見回して 必要な人と分けよう

また、

水面に浮かんだリンゴを見つめる

Hole in the street

歩いている、うつむきながら。また小さな穴を見つけた。
考えている、昨日までの事。そしたら見えなくなってゆく・・・明日の事

何が どうして どこから来るの？
全然分らないけど なんだか寂しい

心に小さな穴が無数にあって
冷たい風が通り抜けては 温もりを求めている
勢いよく笑い飛ばしていた日には 決して見えなかったのに

歩いている、舗装された遊歩道。ほらここにも小さな穴があるよ。
これからの事、考えながら。僕の影が街灯で伸びる・・・そのまま明日へ？

重なり つながり 連続する失敗
何をやってもうまくいかない そんな時

無性に目につく小さな、無数の穴
落としてしまわないかと不安になるほど不安定
スピードに乗って駆け抜けた時には 決して見えなかった

平らに見えて バランスも良かった
でも、ただ見落としていただけだったんだ

今、無数に開いていることに 気付いた意味を僕は知らない
今度はきつと、笑い飛ばす日にも思い出すだろう
本当は無数に開いている穴のことを

駆け抜けながら

歩いてく・・・

また、小さな穴を見つけた

虚像

ゆつくりと 沈みゆく船で先を行く
誰にも見えない 幻のような気分

白い雲は白い 青い空は青い
何て豊かな世界 一周してみたい
透明のままです・・・

悲しんだ
憎しみ集めて放り投げた

気が付いた
また回って返ってくることに

赤い日曜の朝 金曜の夜キラキラ
何でまた繰り返す？ このまま止まりたい
透明のままです・・・

夕方 六時 僕は 一人
人質気分です列車は揺れる
解体 滅亡 躍起になって
新聞紙の記事もまた揺れる

白い雲が薄れ 色づく夕焼けの向こう
何で落とす？ 壊してはまた造るのに
もう消えたい・・・

透明のままです覗きたい
覗いているだけで、もう十分・・・
恐れているのは虚像か？実像か？
透明のままです覗きたい

届く時間と距離

長い時間をかけて遙か宇宙から届く光の
何万分の之一的可視光線がその長短でカラフルになる
この世界の端っこに隠れて暗い過去の一つ一つを
解き始めた頃から僕は多くの事を諦めてきた。

伝えるべき事の多くもまた同じように閉ざし
誰にも知らせないまま消えていったマスターピース
これから、時間をかけて拾い集めていくつもりだ
誰かに見せるつもりもないけど……

早い遅いは問題じゃないけど
タイミングのズレを何より恐れてる

君まで届く時間はここからの距離で分かるよ
ここに居るから、そして、送るから、
君のいるところでしたっけ受け止めて欲しい

ふと思いつく一瞬はいつも素晴らしい、けど
そのときに戻ってやり直したって
今ほど豊富に挫折もないし、高ぶりも感じない
イメージの世界で広げた罫にはまりこんで

ずっと深いところから今度も相変わらず送るんだ、きつと
そうだとすると、
君のいるところでしたっけ受け止めて欲しい

丸くて柔らかい
太陽のオレンジと
甘酸っぱい薄黄色の「ラブ」

君まで届く時間はここからの距離で分かるよ
ここに居るから、送るから、
君のいるところでしたっけ受け止めて欲しい

いねむり

段々遠ざかる教師の声
グラウンドから響く笛の音
蝉が鳴いたら夏だった
頭に乗つけた両腕が暑い

段々遠ざかる現実問題
どこからか響く警笛の音
ストロブのやかんが揺れて
吐く息が白い冬の午後

一年中

僕は居眠りしてばかりいる
全部忘れて真白い体で歩く
眠いから寝るのであって
そこで踏ん張る事はしない

段々近づく新しい扉
過去から響くゆるいリズム
ブレザーの汚れが目立って
背もたれにかけた春だった

初めて止まって考えた
もう一度戻った夏の終り
疲れた僕も舞い散る秋の夜
一人で眠り行く 明日のために

これからも
居眠りしては忘れるのだろう
考えてもしようがないことを
どうしようもない冷たい現実を
あくびもしないで 居眠り、居眠り

居眠りしては・・・
居眠りしながら・・・

「ヨムはサイコーだって。
どういう意味、それ？」

「ようはフツーだって。
そういう意味、それ。」

B面

分かりやすくて親しみ易い
僕のA面はそれを基準に作られる

そんなことを小さい頃から繰り返してきたので
最近じゃ誰に言われるでもなく人前に出ると

愛想良く笑って

手のひらに収まり易い

尖りや 匂いや ど派手な色もない

僕がいる

隠している僕のB面が鏡の中で笑う

一人の時間にはA面とB面がぶつかり合う

確かに両方とも自分自身なんだけど

なぜか本当の僕はB面なんだと考えている

生活のほとんどを占めるA面

本音を集めたB面が

貯まって 膨らんで 破裂してしまう前に

またA面に戻る

オートリバース。

バランスの取れた生き方？

これが一番いい生き方？

スクエア

無風空間で揺れるキャンドル
そつと繰り返す呼吸が明日へ

誰も知らない地下への階段
手探りで降りてゆけば明日へ

広がって、

群がって、

そしたら面白がって、

また、手を伸ばすんだ。

僕は僕自身のスクエアで生き
行き交う人達との間に壁を築く
近づき過ぎず離れ過ぎず

ただ、小さな窓から外を眺めているに過ぎないんだ

置いて行かれないための笑顔
僕をまだつなぎ止めている鍵

自分だけのスクエアは守りたい
けど周りは賑わっていて欲しい

誘って、

断って、

たまには面白がって、

知らん顔してしまうんだ。

君にもまた君のスクエアがあり
お互いが踏み越えてしまう暑い夜
知りたいことは全部を探らず

ただ、自分勝手に理解して窓を閉じる　そして僕の空間へ

僕は僕自身のスクエアで生き
息をひそめて明日を待つんだ

求

求め、求め、求め、
大事な事を忘れてまでも欲しくなつて
ついには
越しちゃいけない一線を踏み外す

満たされて丸いのは地球だけ
欲求が渦を巻いて太陽を回る

求め、求め、求め、
手にしたら忘れ去って また空腹を嘆いている
そして
手当たり次第に飛びつく

満たされて丸いのは地球だけ
その上で欲求を追いかけては
疲れて眠るだけ・・・永遠也。

イン・ザ・スープ

僕がとけ込んで
少しでもアジを足せば
それでいい

何処かで尖って
喉につかえた時点でもう
邪魔になる

僕は イン・ザ・スープ
色は出さずに個性を消して
透明なスープの一部になるんだ

最後はまるやかに
後先考えず放り込まれ
調和しろと言う

僕は イン・ザ・スープ
冷めたら終わる群にいる
評されてもただの一部で終わる

イン・ザ・スープ
解け合う事が
無くなる事になり
いつも目立たないように黙々と

そんなスープ
僕が生きるまるやかな社会
良いも悪いも決められた後

そう、覚えるだけの、イン・ザ・スープ

後悔の杖

いつもちよつと遅い

手遅れの処置に奮闘しては

そんな毎日が重なって

今頃疲れを知ってきた

転んでばかり 見上げては

後悔の杖が後ろにあつて

これで支えれば良かったと

気付いた時には もう怪我をしている

目に付くのは不足ばかり

どンドン足しては重くなる靴

背負っている僕には杖が見えず

また同じように転ぶ

立ち上がり 見回してみると

後悔の杖が出番を待っている

持っているものだけで進もうと決めた。

今度はこの杖で転びそうなの・・・

転びそうなの自分を支えよう

後悔する前に 支えよう

チャイム

始まりと終わりに
決まって鳴る合図

どこからどこまで
何から何まで全部
決められている様な
そんな錯覚に陥って

逃げ出したいけど 鳴ると座る
もう一回鳴ると終わる そして帰る

キンコーン、カンコーン

ぼっかり浮かんだ
帰り道での誘惑

伸ばした手を引かれ
導かれるままに落ちた
自由と不自由を感じ
何でもありえる暗闇へ

鳴らないチャイムが空で響き
もう一回鳴るまで帰れない

逃げ出した先でも探している
ずっと待ってる 導いてくれるのを

チャイムを・・・
合図を・・・

キンコーン、カンコーン キンコーン、カンコーン

そして歩き出した

おいしい

呼んでる声は聞こえますか？

閉め切った心で沈んでる君にも
はつきり聞こえる声で呼びたい

「大丈夫だ」って笑ってあげたい

おいしい

こっちにおいでよ、

独りきりじゃ見えない扉

一緒に開こう？　ここから進もう？

おいしい、

呼んでる声は聞こえますか？

ピエロのようにおどけないで

僕らの前でいつも演じてないで

全部話したら全部忘れて

吹き飛ばすぐらい大声で笑おう？

おいしい

こっちにおいでよ、

創り上げた自分に押し潰されないで

ぶつきたい気持ちも持っておいでよ

おいしい、

そろそろ素直になりませんか？

僕は今、
何かを考え始めた
いろんな事が矛盾して

これ以上進むのが嫌になった

だから少し立ち止まった。
そしたらはみ出した。
しばらくすると何もなくなった。

僕は今・・・
スローな波に揺られながら
船から飛び降りて 一人浮いている

海が広いことを知った。
空が青いことを知った。

この波に揺られながら
自分の手と足で
遥か遠くに浮かぶ島まで泳いでいこうと決めた。

蝶々

程よく緊張すること
成功する秘訣はそこにある、と言う

ガチガチの縄を解いて
蝶々結びで席を立て、と最後に言われた

立ってからの事

それから先にするべき事
教わってないから……分からない

開け方だけをたたき込まれた日々
扉の前で立ちすくんでいる僕

卒業。

向こうに見えるものはみんな

大きすぎて、

明るすぎて、

真っ白に光って、

ミエナイ未来

それが……本当のところ

今までずっと固く結んでいたから
ほどけてしまわないか心配になる

蝶々結びのシューズで飛び出せ？

これからは「自由だ」？

生きたいように？

行きたい場所に？

とにかく

高く 長く 飛ばばいい？

どうすればいいかわからない。

ただ、グラグラして

硬い殻の 弱い中身に

不安ばかりが染み込んでくる

不安は

膨張して

圧迫し

脳をガンガン叩く

そして、焦りにかわる。

ヒラヒラと舞う蝶々、

目の前で揺れる。

風の流れは右から左

蝶々

逆らうように上昇していく。

僕は

扉の前でまだ、しゃがんでいる。

何度も何度も

蝶々結びを固くしながら……

オーバー・フェンス

雲一つない真つ青な空を
白いボールが弧を描きながら
フェンスの向こうへ飛んでいく

囲まれた空間から飛び出して
羽を広げたボールが自由に転がり
未知の道をただ進んで行く

おりこうな僕たちはいつも
あれもこれもダメなことで囲み
限られた範囲で道を決めてる

オーバーフェンスの未知の世界へ
思い切って飛び出してみようか？

頭の中だけで理解している世界
困難を避ける為の丸暗記な知恵

“両手を広げてでも飛べない”と悟る
やりたい事よりやれる事をして
いつも安全エリアで退屈し てる
夢は寝ている時にだけ見ればいい、と

オーバーフェンスの未知の世界が
頭の中だけで造り上げられる

そしていつか、「そんなもんだよ」と言い放つ

オーバーフェンスの未知の世界へ
思い切って飛び出してみようよ

ヤサシサカブセ

誰かの優しさは
きつと、
もつと大きな誰かの優しさに支えられ
だから、
やさしいきもちでいられるんだ

僕の優しさが
仮に、
君に届いて喜んでいるのなら
それは、
君の優しさのおかげなんだと思う

小さな喜びがスタジアムに鳴り響き
体内の細胞を奮いたたせるように
ほんのささいな優しさも
いくつも重なり笑顔が満たす晴天になる

カブセよう
次から次へ
僕から君へ 君から彼女へ 彼女から彼へ

そうして満たそう
小さな、ほんのささいな優しさを
大きなウエーブになるまで
小さなヤサシサの泡を吐くんだ

やさしいきもち
僕に一つ、君にも一つ、
日本に一億、世界に六十三億、

巡り巡って
僕は君にやさしく、
君も僕にやさしい。

デジタルのコトバ

言えない訳じゃない
けど、言わない

例えば

昨夜の夢のようなめくるめく出来事
信じられないような偶然のつながり
剥がれかけた広告の端にあった奇跡
ぶつかって散らかって出会ったキミ
その、続き……

言わない。

ボクとキミの秘密。

(笑)

(焦)

そう、ぜったい、誰にも言わない。

秘密の多くは だから重く
そして愛おしくてチカラもカチもある

デジタルに伝える

ボクのコトバ

代わる代わる伝わるコミュニケーション

ササイナコト

それも、みんな、秘密。

重く愛おしい
僕らだけのカチ
ボクとキミの
これが、愛。

あゝ、扉がない。
出口がない。
飽和してるこの気持ち
爆発寸前。

強い風の方へ

踊り狂う時間だけ忘れられる
そんな出来事を重ねて歳をとる

無駄に思う事もなく毎日過ぎて
始まりと終わりに区別がつかない

誰もが太る ストレスを抱える 鏡には写らない本質的問題

太る。膨張して破裂する

子供は切れてリセットされる

必至で守る僕は膨らんで浮かぶ

プカプカ浮かんでは流される

強い風の方へ

今までは無駄だと思っていた感情

生み出すモノなど何もないと決めつけ

今にも消えるか細い願い フォーカスのぼやけた天文学的思考

無駄。決める基準が狂いだし

あれもこれも「あり」なんじゃないかと

自分の中で風向きがかわる

揺れ動いたままの新たな気持ち

強い風となる

まだプカプカ浮かんではいる

けれど自分の意志で風を起こし

進みたい方向へ流れていく

強い風と共に

強い風の方へ

SOMETHING

伸ばした手の先に
その少しだけ先に
確かにあるモノ

その香りと、色と、輝きと
一度は触れてみたいと感じる
反射と擦れ合うような音

先にある SOMETHING
目で捉え 触ることの出来ない
まるで幻のように白く、ふわふわした
SOMETHING・・・僕は求めている

伸ばしても届かない
でも遙か遠い眺めでもない
確かに存在するモノ

手を伸ばすと、遠ざかり、透き通る
また触れてみたいと 立ち止まって眺めると
確実に見えるカタチ

鮮明に見えて、先にあるもの
見えるだけで触れない、じれったい
それは SOMETHING 名前の知らない
僕がきつと求めている SOMETHING

もしかしたら NOTHING
全部が幻かもしれないし
ひよっとしたら EVERYTHING
届きそうなモノ全部が

僕の求めているモノかも知れない

どっち？

いつから僕らは

黒を捨て 白さえも拒み始めたのだろうか

曖昧模倣なグレーの世界で

戦争反対を唱えている

いつから僕らは

どっちつかずの笑顔で 《笑う》事さえ忘れたのだろうか

良いか悪いかを他人任せにして

出た結果の責任逃れをしている

いつだって

僕らの前には「どっちか」の選択が用意されていて

「こっち」だ、なんて選ばなくても

始めから決まっているような気がする

いつかは、

僕らの意志のまま

選んだ方で思いつきり笑うんだ

みんなで一緒に笑えるといいな

どっち？

こっち？ あっち？

少なくとも何が違うのかぐらいは
分かっていたと思う

並木道

かかとを踏んだまま一人 並木道を歩く

ただ目を閉じて、

見えてきたモノだけを選んで

そつと耳を閉じて、

聞こえてくる声だけを頼りに

進んでいけばいいのに

わかっているのに・・・

かかとを踏んだまま一人 並木道を歩く

同じ空の下

街に吹く風が灰色であること
何もかもがうやむやのまま
強いて誰かに責任を押し付けては
逃げるように輪の中で回転する

事の発端は一体何だっけ？

君だろ？いやお前だろ

結局これからどうしたいんだろう

伝えたいこと。

それは今日もどこかで爆弾が落ち

そして吹き飛ばされる年寄りの家があるということ

買い物帰りの

たとえば誕生祝いのケーキを持った

幼い子が片足でこれからを過ごさなければいけないという事実

ハンモックに揺られて海辺のロッジ

同じ空の下で悲鳴をあげる者がいる

原色のジュースを吸い込む間に

一体何人が命を落としているのか？

透き通るような海の色

楽園か？同じ世界か？

このまま何もせず見ていていいのか？

同じ空の下。

今日もどこかで争いが起こり

顔も形も意味も理由も何も分からないまま銃を構え

信じる事が出来ない悲しさを怒りに変えて放つ

相手より早く、そして自分を守るために引金を引く

何もしないまま、ここで揺られていていいのだろうか

同じ空の下 今日もどこかで爆弾が落ちる

明日

悲しいのは、目で分かる
口で感じる 頬から伝わる
その、少し下がった顎でも・・・

背丈ほどの銃を持ち
見えない敵を威嚇する

君の、震えた、細い両足

笑う君を 明日は見たい
そんな明日を 一緒に築きたい

足りないのは、袖で分かる
ほころんだ ズボンで伝わる
その、埃にまみれた髪の毛でも・・・

前後左右で君を縛る虚構
見えない敵に恐れを抱く

君の、透明な、強い瞳

信じる未来を 君と見たい
そんな未来を 明日から始めたい

君はまだまだ好き勝手にいい
あちこち走り回ればいい
君は、まだまだ子供なんだから・・・

正義

信じたいのは正義 だけど
用心したい悪意と憎悪
三歩歩けばぶつかる罫
複雑デジタル便利な世界

生まれた時から本音を隠して
丸裸になっても見えないように
涙も笑いも怒りも全部
コントロール出来るから大人？

存在自体がフィクションなのかも知れない
最近じゃ滅多に聞かない 恥ずかしい位の正義

隣の芝生は青いから憎い？
暗くなったら忘れる程度の嫉妬
一から十まで被害妄想で
誰かに向けて放つヘルプ・ミー！

生まれたままの自分なら
正義なのか悪なのか？
大昔の博士達は悩んだ結果
僕らにその答えを預けた

今となつては全部が正義
考え方次第で行ったり来たり
の賞賛が続く
誰にとつての正義が重要なのかを
考えて
ほら、また無いものねだりで嫉妬
している

もう存在自体がフィクションなのさ、きつと
伝説のように消えていった完璧な正義

真っ白い空

ホームの雑踏も微か
雨上がりの重い午後
使い古した僕を抱いて
ベンチに一人腰掛ける

剥がれない古新聞と
飲みかけの缶コーヒー
スローモーションで流れてく枯葉
止まった時間に目を閉じる

ふと東に広がる空を見た
真っ白い空をただ見ていた
頬に風を感じながら
何もない真っ白い空を見た

工場の屋根から煙があがる
追いかけるように鐘がなる
ひとつずつ僕に戻り
電話のベルで席をたつ

歩きながらまた空を仰いだ
灰色の雲に覆われた白い空
遠くに透明な光が細く射すから
「これでいいんだ」と歩き続けた

真っ白い空と冷たい風
流れる今日と明日も
どこまでも続く空の下
いつかは晴れるから今は
「これでいいんだ」と歩き続けた

一つ終わって乗り換える

次の街に向かう車窓の風景

今まで見えなかったモノが

太陽に照らされて

クリアーに 鮮明に 見えてくるから嬉しくなる

僕らは途中下車と呼んで恐れた

乗り換える為のストップを拒んだ

ただ我慢して終着駅を目指し

同じ風景に飽き飽きしながら

文句の一つも零しては それでも・・・

雨が降り続いても休む事なかれ！

コツコツコツコツ、コツコツコツコツ。

悪くないけど 冷たくないかい？

AラインからCラインへ

北上を続けるこの列車で遠くへ

地図は持つてる 自分行き

揺られながら時々寝坊したり

でも色褪せない地図だけはしっかり握りしめて

時期が来たら乗り換える Fラインへ

混じり合いながら Lines 縦横無尽

出会い別れ、別れて結ぶ。

進んでく曲線にパターンはない。

乗っては降りて、また乗って

縦横無尽の Lines

僕を運ぶ

遠くへ 未来へ

そして、自分行きの終着駅へ

〇（マル）

笑顔は丸い。丸い笑顔。
笑えば柔らか、ソフトな形。

どこか無防備で、とても強い。
君の笑顔で、丸い日曜。

泣いても笑おう
最後は笑おう
笑って、笑って、
マルく生きよう

寝ぼけた春。虫達の歌声。
芽を出したかけら、風にのる。
花が咲いて、やがて散る。
また春になって、風にのる。

丸い丸い地球で
繰り返す季節
巡って、巡って
マルく生きよう

マルく生きよう。

過ぎてゆく時の中で

小さくなったオヤジを見た
隅っこのベッドに座ってテレビを見ていた
二網の蜜柑をさげて
元気そうに声をかけてみた

大きくなった自分を感じた

病院の廊下を通り

223号室の前で

不意にオヤジの名前を見つけた

止められているタバコに火をつけ
少し苦しそうに顔をしかめている
弱いところは見せられないと
必死にがんばっているオヤジを見た

強くなったハハを見た

朝5時の目覚ましで起き

「行って来ます」と

まだ眠っている僕にそとつぶやく

布団の隙間から少しだけ見えた
ハハの背中は何かを語っているような
“助けてくれよ”と残しながら
強いハハは仕事へと出かけた

過ぎてゆく時の中で

大きかった父の背中が縮まり

頼ってばかりだった母が強く見える

そうして休まず時は過ぎる

変わらず眠っている僕は・・・

オハナシ

ここを掘れワンワン！

意地悪な僕はそんな犬の言葉なんて

信じないのかも知れない

掘った人を眺めては

その宝物を奪おうと考える

オハナシの主人公を今日も探している

自分になろうとは・・・思わない

嫌だけど・・・そう思っている

隣で笑った。

また、君が隣で笑った
二人、くっついて見てた映画
別に、おかしくないのに
急に、君が隣で笑った

僕の隣に君がいて
何でもない映画の話
それでも僕の大事な
大事な所で君が笑った

幸せ、口癖のような言葉
今は、毎日が普通に幸せ
時々、誰もいない部屋で
急に、空を切る僕の右腕

僕の隣に君がいて
何でもない話の続きを
繰り返すように聞いていけば
大事な所で僕も笑える

隣で君が笑った。
隣の僕より大声で
何でもない映画の話
君がまた隣で笑った

強く抱きしめる

矢継ぎ早に繰り出される君の言葉
らしく無い仕草でまき散らし
止まらない感情をむき出しのまま
全てを僕にぶつけてる

黙って見つめる僕の真上を
できたての言葉が通り過ぎては
取り繕う僕の優しい気持ちも
注いだ風になっってしまう

うまく言葉が見つからないから
君の全部をむき出しになったその全部を
強く、強く抱きしめる

誰かのせいにして今を受け止め
何かのせいにしてどこかに逃げ込む
言うだけ言って、泣くだけ泣いたら
ゆっくり眠ればいい

黙って抱きしめる僕の中で
疲れ果てた君が眠りにつけば
静かに刻む呼吸のリズムも
これからの力に変わるような気がする

何から始めればいいのか分からないから
眠った君の温もりだけを感じて
強く、優しく抱きしめる

cutting

重ねるように

あれもこれも身につけて

君は誇らしげに

微笑んでる、けど

肝心な君が見えない。

光るのは飾りだけで

埋もれた君は濁る

何も加えずに

鋭くムダを切り取ったら

多面体になった体で

君自身が、そう

君自身が虹色に光る。

カットを一杯いれて

キラキラ輝きながら

輝きながら、誇らしげに、微笑んで欲しい

サイレンス

黙ったままうつむいて

二人、時間だけが過ぎてゆく

きっと何か理由があるから

ただ、信じて言葉にはならず

問いただしたりする気もないし

その答に嘆き叫ぶ事もしない

そつと

僕らの間にたたずむサイレンス

お互いの間を 音のない言葉が行き交う

なかなか上手く君のこと見れなくて

電灯がサラサラと 僕らを照らす

呟くように吐き出した言葉

今、僕の耳に届いた「ごめんね」

涙が頬を伝い 君の声が濁った

ただ、信じてた僕の 言葉はでない

そつと抱きしめた君との間にサイレンス

心臓だけが音を立て頭の中は白くなる

サイレンス。

その中で生まれた今の君

もう一度抱きしめたら 僕の中に浮かんだ

最後の優しい言葉

「いつでも戻っておいで」

サイレンス。

そしてまた、サイレンス。

全部フィクション 僕がヒーロー

君のピンチを助ける術を

そんな英雄的存在に

この僕は、ちっぽけな、この僕は

決してなれない事が

とにかく悔しい。

助けてくれと言っているのかい？

僕には聞こえるけど理解できず

勝手に導き出した回答が否定する

そして、

僕は君がピンチなんかじゃないと

思い込んだら 安心して眠るんだ。

ヒーローだって？

誰が誰に誰のために

ヒーロー？

だから

いつだってフィクションになりえるのかもしれない。

ガチガチにしがみついているロードマップ

従えと言われると逸れたくなるのが僕の癖

囲まれ 縛られ 奪われ 笑えと 強要される

見られることとフラッシュの嵐がガラス面を通して

ナイトメア

うなされて目覚め

一息ついたら空想する

ヒーローのこと。

創造したヒーローが僕の仮面をかぶり

そして、なんだか薄ら笑い

フィクション。僕が主人公の物語。

全部フィクション 僕がヒーロー

エピソード

「内緒ね」って言ってから
君が教えてくれた笑える話

とつても、おかしな、エピソード

「ああ、内緒さ」 頷いて以来
誰にも言っていないその話

僕しか、知らない、エピソード

些細なそんな話を
二人だけの秘密にして

僕がその約束を守り始めた時から
君が本当に大切になった気がする

「そういや、さあ」って時々思い出しては
二人だけで笑えるその話

今でも、おかしな、エピソード

「もお、言わないで」 赤くなった君の耳
誰にも言っていないその話

僕らの、秘密の、エピソード

いつもなら誰かに話して
そしたらみんなで大笑いして
君の一面を友達の話として言っていた
けど君との秘密を守り始めた時から・・・

僕には、大事な、エピソード
君の、恥ずかしい、笑える話
僕らの、始まりの、エピソード

夏

蝉の声が九時を知らせる
五月蠅いぐらいに

遠い旅路をたどってここまで来た
初めてのひとり旅

夏の太陽は部屋に暗い影をつくり
外の海や人々を楽しそうに映し出す

僕はまた しおりのページから本を読み始めた

時々吹き付ける潮風が
窓辺の風鈴を躍らせる

その音が部屋の静寂を破り
心地良い音色を響かせる

夏の終わり

二、三日はここにいます

Thinking

僕の中の血が回ると
難しいことを考える

他人のことを思うと
それ以上に自分の事が気になる

答えがあると聞くと
考える力が増していく

言葉に出さないと
分からないことが大きくなる

僕は今、遅い夕飯を待ちながらベランダでひとり
窓から外を見ている
本当はうっすら映る自分に重ねながら

幸せの風に包まれると
その後の不幸が恐くなる

十二月のカレンダーをめくると
古い自分を考える

全てメモに取らないと
明日の事を忘れてしまう

つまらないテレビを見ると
これからに自信が出る

パレットの中でつくったような夕暮れに
宇宙を感じている
本当は黒いことさえ疑いながら

リアル

雨は嫌い。暑いのも嫌。
長い一本道は飽きるし
迷うほどの大都会も嫌い

絵に描いた餅
食べれなくてもそれが好き

逃げるようにバーチャル
それがお気に入り
のイニシャルだけの関係で
それぞれのアクチュアル

表の笑顔。本物の気持ち。
出さずにすむなら
しまったままでやり過ぎ

明日はあした
出来事はみんな過去の事

埋もれて忘れるリアル
ほんとは大切なコーデリアル
シニカルに含み笑って
いつも誰かのイミテーション

リアルはリアル。
向き合って 触れてみて
生きる事のリアリティ
空気を吸って 話してみ

New Day

山が隆起し、空が縮み、海が広がる。
不動の万物は流れを持ち
輝く星でさえ方角を変えてゆく

何でもありな今日と明日の間で
怯えたまま突っ立ってる・・・

想いを巡らすのは決まって昔話
あの頃は良かったと逃げ込む

いっそ

突き出た山に登ろうよ
縮んだ空の下、強い風を送ろうよ
沈みかけた島の上で、
迫りくる水際に堤防を築こうよ

いくつもの選択肢から選んできた
僕らの結果が淀み
堅いイシ（石）になるなら

そのイシ（意志）を使って
また新しい家（うち）を建てればいい

そこでまた違った快適を見つければいい

大きく流れ出した時間の中で
小さくても沈まない舟を浮かべて
自分で舵を取りながら進んでいく

底で流されるじゃなく
「上」を進もう！

さあ、New Day
今から始まり。

海人

喜び抱えて転げまわった
悲しみ忘れて笑い合った

波に消えた ああ 過日

幾つも二人で乗り越えた
ひとりになるのが怖かった

時が来て ああ この日

かすんだその先、目を細め
示した未来へ歩き出した

鳴り響く ああ 明日

海を背に向かう街

ああ 明日
ああ 明日

振り返る 波の音

「行って来ます。」

「イッテコイ！」

つまずいて、転ぶまでの刹那

つまずいた。

両足が宙に浮き

地面に吸い寄せられる

拡大し 接近する

その刹那を人生に例えて

僕らは低下し苦悩する

痛みに備え 身構えては

時間がないことのせいにする

現れて 具体化する

その刹那を恋愛に例えて

僕らはその対象にもがく

触れられず じらされる恋心

倒れた衝撃で嘔みしめる感触

つまずいて、転ぶまでの刹那

生まれて死ぬまでの限られた時間

急ぐことは、ない

そうしても人生は一瞬の出来事だから

同じだけ吸い 同じだけ吐く

僕らは平等に命の重さを与えられ

そして倒れていこうとするに過ぎない

僕が見ているモノが

過去にはなく、未来には変わり

僕に見えるのは

かつては見えず、気付いていくモノばかり

頬から伝う地熱と砂

ザラザラとしながら眠るように終わる

また立ち上がったの繰り返し

つまずいて、始まり

倒れて、終わる。

二本足で歩く頃から、これが永遠

楽しかった記憶だけ 次々に出てくる夢が
気怠い朝の光で途切れため息が漏れる
きつと 僕が帰れない理由など想像も出来ずに
留守番電話に「一度帰って来い」と吹き込むんだろう

僕だって

帰りたい・・・

けど

帰れない・・・

Heart-Warming Sweet Sweet My home

アイスクリーム

大好きなのはアイスクリーム
ビターコーヒーを飲みながら
結局そうゆうことかも知れない

・・・そっと呟く

僕は甘く
世の中苦い

だから
体の中をビターコーヒーで満たし
同化しながら進んでゆく
微笑みもする（省かれないためには）

チョコレート・アイスクリーム
最後に食べたのはもう何年も前
いつの間にかそうなのか知れない
・・・そっと呟く

僕は変わり
縮んでいった

いつも
多勢に飲まれて「YES」
目立たないように屈みながら生きる
嘘もつく（それが本当にも変わる）

アイスクリーム
僕の好きなもの
嫌いだと嘘をついた
甘い 甘い 僕の本当

Dance with me ?

決めのポーズでサヨナラ
カッコつけすぎた夜に見た
そうとう情けない自分自身

こんなもんなかな？

踊りませんか？

僕とこれからこの道をまっすぐ 手を繋いで歩いていきませんか？

言えなかった言葉を おどけた声で呟いた、 Dance with me?

かすれて聞こえない君の返事
格好悪いから見せたくない？
何も言わずに去った後ろ髪

雨がしとしと・・・

踊りませんか？

こんな雨でもずぶぬれになって 昔の映画みたいにクルクル回りながら

(ああ) ちょっと前なら自然に言えた言葉を飲み込んだ、 Dance with me?

簡単な事だったのかも知れない
ただ

踊りませんか？

楽しみませんか？

幸せになりませんか？

出来るか出来ないかを考える前に
踊りませんか？
そう言えば良かった・・・

頭の中でもう一度 おどけた声で呟いた、

Dance with me?

そうゆうモノに私はなりたい

テレビに映った子犬
タイムサービスの切り花
おとぎ話みたいな柄の服

「かわいい」

感情いっぱい君が発する言葉
その対象になっている
僕から見れば何ともないモノ

でも、それでも、いい
君にとって感情いっぱい
そうゆうモノに私はなりたい。

限定モノと旬な新作
ランチタイムのパスタ
大きく包み込む様な男優

「絶対欲しい」

ありきたりでも望んでしまうモノ
そんな日常の一つに
そんなの今だけだよと 僕は思うけれど

それでも、いい、いつか
一瞬でも君が心から欲しが
そうゆうモノに私はなりたい。

誉めも憎みもしない 空気のような
そんな透明な存在ではなくて
もつと君の感情の的になるような

そうゆうモノに私はなりたい。

砂

サハラを二人は歩いていきます。
何も見えません。聞こえませんが。
ただ無謀に吹きつける風と
寂しい砂・・・それだけです。

だけど、あなたがいます。
隣にはいつもあなたがいてくれます。

夕べ二人で造った砂の城も
寒さに負けてなきやいけれど
今朝は本当に強い風です。
音もたてず砂は流れています。

今はすごく水が欲しいです。
サボテンは強いです。元気です。
遙かまで何も無いこの地で
終わりのないキスをしませんか？

「人間は無力だ」と聞きました。
その事を今、感じています。

いつからか口ずさんでいる
日本の歌は暢気ですね。
今頃日本は春でしょうか？
リアルな夢を見えています。

風を感じます、頬を打つ砂とともに。
時間を感じます、時計もないこの大地で。

素敵な出会いがある
とつても偶然がある
トラブルもある
嫌にもなる
だけど
また行きたくなる ひとり旅

ヘンナマジナイ

流れ星が見れるって信じてた
子供の頃の変なおまじない

河原に座って見上げては
冷たい風に鼻がムズムズして

でも、疑うことなく待っていた
星が広い夜空を流れるまで

今では分かる。

そんなの嘘だって。

でも時々

僕は奇蹟を信じて念じるんだ
子供の頃のあのヘンナマジナイ

加速するのは下降するときだけ
それがこれまでの僕の経験で

スピードを増して打ち上げられる
ロケットは今日も失敗したって聞いた

何となく憂鬱な気分 「やっぱりか」
流し込み かみ砕いた気持ちを消化して

今では分かる。

そんなもんだって。

でも時には

勢いよく打ち上がってみたい
大空中を速く長く流れてみたい

目を閉じて願った あのヘンナマジナイ
夢でもいいから見れますようにと

花が咲き、枯れるような人生

いずれ咲く事を決められた花のつぼみ
そんな幸せとその事自体が持つ不幸せ
もし、願いが叶うなら

咲くかどうかの選択をさせてください
何色に咲いてもいい環境をください

好きなきときに咲き誇り

思いつきり散りたい

春の花や夏の季語なんて

意味を越えて自由に咲ける

時期を悟って自由に枯れる

風に揺られる花になりたい

文字通り花が咲き、枯れるような人生

浮いては沈んで また浮かんでの繰り返し

波形曲線の成れの果て

持てるだけの思い出と成果を残したい

疲れ切って枯れる時を満足感で満たしたい

ただ決められた通りに育ち

予想通りの花をつける

形の善し悪しの評価なんて

限られずはみ出して咲きたい

惜しまれる様に綺麗に散りたい

自分の温度で咲いて枯れない

自分で咲かせて

そして、枯れない

でっかい太陽の下
ここで生きよう

一番大切な
「これから」のために
手をつなごう

旅の途中

空、飛んじやった
大地、踏んじやった

カラッポだった心に貯まる
マイルとメモリー・・・溢れ出す

心がホッピング カラフルなラッピング
玉手箱みたいな不思議なプレゼント

これは何？って、どうでもよくて
その手で解いて、そしたら見つめて
感じたままで伝えればいい

花、摘んじやった
空気、嚙んじやった

駆け足だった体に染みる
TAKE IT EASY・・・一休み

心がランブリング 勝手にホッピング
会いたい自分に会える場所

ここはどこ？って、どうでもよくて
まだ旅の途中、まだまだ途中さ
このまま先へ進めばいい

さあ、もつと先へ
ずっと 先へ

サンクス・ソング

天から舞い降りた白い羽

幸福よ、幸福よ、この地に咲き誇れ

無邪気に微笑む天使の杖で

魔法の様に、奇蹟を巻き起こして欲しい

大の字になって寝ころんだ

見上げた空に描いた永久のブルー

今ここにいることへのサンクス・ソング

美しい世界へと繋ぐ賞賛の歌

僕らを包む山、海、空、光り

空気よ、湧き水よ、また透明に戻れ

世界中の優しさを共存させ

争わず、奪わず、分かち合いながら歩もう

笑った昨日の出来事も分けよう

哀しくて落ち込んだ痛みも放とう

そしたらみんなが歌おうサンクス・ソング

今ここにいる事への大きな喜びを

It's so beautiful

何も埋まっていけない大地
警報の鳴らない静かな夜
程良く降り 豊富に照る
視界を遮らない風通る場所

一本道がどこまでも続き
ありのままの姿で木々は踊る
原色の夕日が遠くで沈めば
ゆっくりと一日が終わっていく

頭の前からつま先まで
一直線に繋がって、一瞬止まる

取れたての果実を積んだ車が
砂埃を巻き上げながら過ぎる
生きるための糧を売っては
生まれるための金を集める

子供達は真っ白いパレット
明日の色を未来の水で薄めては
淡い希望を顔に焼き付けながら
大きく今日の出来事を描く

目に焼き付いた景色と心が
ダイレクトに繋がって、強く刻む

口を開けたまま、じっと見つめては
小さな声で、そっと呟く、It's so beautiful

花火

音、匂い、光、そして湿った風
アイツ、君、仲間、そして僕

喧嘩の始まりも
仲直りも
慰めもお祝いも
僕らはいつも花火をしながら

花火が輪になり 僕らは唄った
僕らが輪になり 花火が咲いた

夜、砂、サンダル、そして静か
笑い、叫び、また笑い、時々軽い火傷

旅立ちの別れも
僕の告白も
認め合いながら
声に出したい気持ちの全部を

花火が照らし 僕らが唄った
唄った僕らを 花火が照らした

花火が輪になり 僕らも輪になる

夏の静かな海岸で
朝まで花火をしながら・・・

The third man

特に穏やかな春の夕暮れ

川原で眠りこけた私がいる

未来の―自分―と、過去の―ぼく―

現在の―私―を見つめている

寝過ぎして、しくじった―私―を

「偶然だよ、気にするな」と―ぼく―が慰め

必然なんだと、薄く笑う―自分―が振り返る

偶然と必然の間で今の私は生きている。

歩いていく私から未来は見えず

振り返った過去からも今は見えない

時々未来への壁を通り過ぎて

目覚めると忘れてしまう必然がある

デジャブなんて言葉で鵜呑みした

偶然の出来事は全て未来からの必然？

失敗しては膝を抱え

偶然起こった些細な出来事に

法則を見出してゆく

そして、そんな出来事を必然に変えていく

偶然と必然の間に大きな穴を開けて・・・

現在と未来の壁を自由に行き来し

―私―が―自分―に追いつき

「つまらない」と愚痴を言っている明日の―自分―を眺める

そっと目覚めるとまた、

いつものように寝過ぎした朝が始まった。

「つまらない」

私はそっと呟いた

Keep throwing

グラウンドを離れて知ったこと

投げることから逃げても何も見つからないこと

ストライクだけじゃ三振は取れないこと

そして、

とにかく投げ続けなきゃだめなんだということ

記念日

はなをかう まっかなはなを
ひとがむれ ながされてゆく
きみにあう いつものぼしよ
てをふって かけよっていく

二人笑い 腕を組み 歩き出す

決めておいた映画 並んで見る
ありきたりな話で 同時に泣く
後押しするように 話が込入り
あきれたように君 天井を仰ぐ

まちをみる たかいみせから
かたがこる とまどいながら
のみすぎて あからんだかお
ろうそくが ぼんやりうつす

トイレに立ち その隙に 花を置く

覚えていたのかと 君が尋ねて
わすれていたよと 僕は照れる
特別じゃないぞと 念を押せば
一年目の記念日が 日をまたぐ

小さな毎日に
散らばった楽しみを拾い集め
もう一年過ぎた
そして静かに二年目が始まった

覚えていたのかと また尋ね
覚えていたよと、僕が照れる

かちんこ

アクション！

顔を洗いスーツを着込み

部屋の鍵を閉めたら・・・かちんこがなる

僕は「苗字」で名乗り そう呼ばれ

名刺を渡しながら作り笑い

心と頭を切り離して言葉に順番をつける

優先すべきことは 利潤／効率／プロジェクト

・・・結局全部 損は駄目で得する為の言葉

カット！

顔を洗いスーツを脱いで

シャワールームの扉開けたら・・・かちんこがなる

「名前」で呼ばれ 「俺」と言う

バカ話と夜更かしで腹をかかえて笑い

気持ちのままにグラスを空ける

大事なことは 君／今晚／今度の温泉旅行

・・・とにかく これからの俺ら

アクション！

顔を洗いスーツを着込んだら・・・

「苗字」で演じて 批評を受ける

得た額で君との幸せが決まる？ ような気がする

かちんこが目の前になって シーンを重ねるたびに

優先することと大事なこと

両手に抱えてバランスをとって歩いてゆく

これからもかちんこはなり続ける

いつか 僕が僕を自然に演じる事が出来れば・・・

セリフと笑顔に心がこもれば

評価が上がり 額も増える

君も幸せになる

って、ことだろ？

アクション！

赤信号

「何をそんなに急いでるの？」

何かに追われているから走ってる

そんなんじゃないんだ

ただ、

ただ早く家に帰って「ただいま」って

母さんに「ただいま」って

ああ、また赤信号。

ああ、また赤信号。

早く変われ！

イチ、ニ、ツサン

よしっ、今から帰るよ

「そんなに急いでどこ行くの？」

大事な大事な用事があるんだ 内緒さ

そう、

内緒の約束 誰にも言えない

これからユミちゃんと大事な

大事な約束があるんだ

ああ、また赤信号。

ああ、また赤信号。

早く変われ！

サン、ニ、イチッ

よし、すぐに行くよ

待っててね

唄おう。

一日の終わりに
あれ？って思う

何となく つまんないんだ

掴みきれないモヤモヤが
晴れないまま鬱積しては

ほら、また、
あれ？って思う

気になりだしたら止まらない
考え出したら膨れてくばかり

だから、
慌てて誰かにメールしても
返事のないまま余計にはまる

これは完全に
つまんない毎日だ

そんな時はあえて
思い切り青臭くて恥ずかしいほどの
莫迦みたいな理想を一生懸命大声で

唄おう。

ワワワ ドドド って
訳もなく ハラからでかい声で……

あれ？って首を傾げる前に
唄ってみよう。

パラダイス

タン、タン、タンツ
ステップアップで飛び越えよう

視界を遮る高い壁の向こう
朝日も夕日も昇り降りする
不思議な 不思議な水平線

嘘みたい、だからパラダイス
越えた者だけ見ることのできる
嘘か誠か戻った者がいないエリア

パラダイス。ならダイス、回せルーレット
勝負は一回。一か八かの人生ゲーム

トン、トン、トンツ
進めるコマの一つ一つで集めよう

何でも叶う万能ツールさ、マネー
大切なのは気持ちだと君が言う
一体いくらなんだ？ その気持ちって

お札空かして覗く 夢の世界
見えるのはこの世に存在するパラダイス
最初から最後まで必要なのはマネー

パラダイス。信じてる、そんなパラダイム
マネーは万能。何でもかんでも手に入る

パラダイス。

片道分のマネーだけを手に入れて 戻ってこない者もいる
それもまた パラダイス

昔の昔

昔の昔、スフィンクスは砂に埋まり
アンコールは森の中で崩れていた
川だったところが干上がった窪みとなり
島だった過去は海面下に沈んでいった

昔の昔、太陽まで競って伸びた木々は
吸い切れない二酸化炭素を吐き出し
快適空間を造る自然のシステムが
人工的に不快へと成り変わった

ただ、
昔も今も変わらず地球は丸く
月はなんとなく奇妙に滲む
悲しい時の涙と 嬉しい笑いが
身近な世界には溢れている

昔の昔、暗かった夜が明るくなり
さわやかな朝が失われていった
春夏秋冬のどれもがバランスを崩し
綺麗だった海には飛行場ができた

昔の昔、価値を持たず埋もれたモノが
掘り起こした者の手によって重宝され
本当に大切な言葉やつながりが
無機質な関係の中で消えていこうとしている

せめて、
未来の地球も青いと言いたい
透明な空気を深呼吸したい
涙を枯らさず 柔らかく笑い
宇宙空間は謎のままであって欲しい

受け継いだバトンを渡すまで
今が昔の昔になるまでは・・・

ホントの理由は
ポケットの中の
ダイヤモンド

ホントの理由

さつきから何度も理由はないって
ただ声が聞きたくて 会いたくて
君に会いたくて来たって言うのに
また、君は尋ねる ホントの理由

いきなりインターフォン
ちよつと驚いて、君
いつもの綺麗な部屋。掃除好き。

とりあえずカンパイ
いつもと違う僕に
「どうしたの?」。これで4回目。

明日仕事なのに? ってそれも分かるけど
今日は会いたかっただけなんだから

いくらでもチャンスはあって
今だと思っても、僕
なかなか言えなくて。時間が過ぎて。

急かすように静かになって
感ずいてる君
次を待ってる空気。ただ過ぎる。

また言いそびれた帰り道
ポケットから出した ホントの理由
月の綺麗な明るい歩道
少し光って またしまい込んだ

ホントの理由は ダイヤモンド
ポケットの中の ダイヤモンド

真ん中に、君

少し陽が射した朝
歩道橋のてっぺんから
小さく君が笑った

人混みから一歩外れて
立ち止まった僕も
君に小さく微笑んだ

後ろから射す金色の太陽と
寝ぼけ眼で見上げる僕の

その真ん中に、君がいる

混乱してた頭の中
冷たい膜が心を覆い
昨日を引きずったままの僕

そんな朝の約束の時間
歩道橋のてっぺんから
小さく君が笑った

君の笑顔で温度が増せば
心の中が穏やかになる

そんな僕の真ん中に、君

ちょうど真ん中に、君がいる。

ほら、

両手ですくった花びらが

風に舞った。胸が舞った。

君にマッタ。そこでマッタ。

考え抜いたセリフを告げて

風が刺した。胸を突いた。

君が頷き、つまずいた僕が笑った。

ほら、

涙ノ町から順番に灯りが点っていくよ

幸福橋を渡って一緒に帰ろう

君の耳元でピアスが光った

小さく揺れた。心臓が鳴った。

ユラユラ揺られて、肩を抱いた。

何年かに一度の星の群れが流れて

君は目を閉じた。願い事をした。

そっとキスした。君もキスした。

ほら、

満月公園のサクラがつぼみを付けたよ

街頭の無い所で、見上げてみよう

どこまでも黒い夜空

何万个も散らばった星

広い宇宙で

こんなに、二人、近い

ほら、

君の手がこんなに冷たくなってる

太陽置き場で暖かいモノでも飲もう

一番大事な人のために

風邪気味だった君からのメール
早く寝ろよの一言で返した僕

帰り道。ふと気になって

君が好きなパイナップル 閉店間際の店で買った

君のためにすることの多くは

いつも信じられないぐらい

突然で 遠回りで 駆け足なんだ

でも受け取ってくれる君がいるから

ありがとうって微笑んでくれるから

鼻声のインターフォン「どちらさま？」

「俺だよ」って笑いながら答えた

部屋の中。今まで寝てた君

無理して起きては君が言う

「ご飯がまだなら何か作るよ」って

君がやってくれることの多くは

いつも信じられないぐらい

危険で 無謀で でも暖かいんだ

手伝う僕の手を 握り返した君のため

僕には一番大事な君のために

君が僕に

僕が君に

一番大事な人のため

無理なことも

ついやってしまう

それをお互いで助け合う

一番大事な人のために

色々

真っ赤な恋をしました。
そしたら空色の顔で君は、
柔らかいレンゲの口づけ

触れた瞬間、
僕ら頷いて、

何色にでも変われる魔法の様な
不思議な世界で浮かんだ恋に揺れました。

黄色い嘘を重ねた僕に
真っ青な顔で君が疑えば
芝生の緑に溶けた言葉

謝って僕、
頷いた君、

色んな出来事が心の中でまざり
いつも最後は真っ白になって忘れます。

一番初めの照れくさい気持ちのまんま
いまでも真っ赤な恋をしています。

問題なのは・・・

問題なのは

やりたいことより やらなきゃいけないことで手が回らないってこと
もっと問題なのは
そりゃそうだと ため息ついてること

とつても大事なのは

どうせやるなら懸命にするべきだし ため息つくならやらなきゃいい
言ってしまえば
別に好きなことだけしてても ため息つきたい時もあるし
だからって他にいくわけにもいかない

つまりは

早く寝て、また明日がんろうって事か？

いや、問題なのは

いつも明日に持ち越しちゃうところ

なのかも知れないな

おお！こんな時間、もう寝なきゃ。

一番の問題は、とにかく明日寝坊しないことか。

そして、行くんだろう

きっと僕らは
いつも何かを無くし
そして、行くんだろう
どこか遠い街へ

ずっとこの先に降る
雨はまだ下りずに
カラカラに乾いた大地が・・・割れる

それでも僕らは
全てを受け入れて
そして、行くんだろう
落としたモノを拾い

拾いあげてから、また
別の名前を付けては
チャラチャラと鳴らしながら・・・流行る

始まりと終わりに 決まって落ちる
温度と灯りと 休息の為の静寂

きっと僕らは
同じ道を飽きる事なく
こうして、行くんだろう
新しいと信じた
未来に・・・

だれのせいでもない

今、ここにあるモノ

白い坂道 天気雨

折れ曲がった明日と重い風

不満だらけの現実に含まれ

不器用な反抗ですりむいても

だれのせいでもない。

雨続きを憂いても 飛んでく鳥においてかれても
現実が現実。

そう、次の事を考えよう

今、僕にあるモノ

疲れた筋肉 空白感

どんだん内部が蒸し暑くなる

悔やんでばかりで進めぬまま

「もし 仮に もう一度 あの時を？」

ここに立ち こんな風に嘆いている自分の姿も
現実が現実。

さあ、次の事を考えよう

立ち上がってその一步を踏みだそう

116 パワー

何もないから見えないんじゃないやなくて
何も見ないからカラッポなんだ

出来上がった物ばかり与えられて
それ以上の事はずっとあきらめてきた

時々思う。

今あるモノの多くを創りだし
便利に改良してきた人間の力を

そう、このパワー。

想像する無限の力

僕たちは空を飛び 光よりも早く動き

そしていつかは

創造した街でごちそうをほう張るんだ！

前後左右 全部ふさがって

突っ立ったまま過ぎるのを待っている

進む道を一本しか知らないから
行儀良く列になって待つしかないんだ 青になるまで

強く思う。

この広大な大地に地図などないと
行き先も道順も手探りで進めばいい

そう、このパワー。

次へ向かう無限の力

僕たちが道を作り 新しい価値を生み出すんだ

そしていつかは

創造した場所で「らしい」毎日を暮らすんだ！

このパワー 無くさない。

一九九五年一月十七日 午前六時四十五分 阪神大震災

空

瓦礫の中から家族の写真

一緒に笑ってた・・・母は・・・

もういない 雲の上

四角く尖った心でいつも

素直になれなくて・・・ごめんね

何もかも遅すぎた 何もかもなくなってしまったけれど
心の底から母に話しかけてみる・・・

空は笑ってる 僕は泣いてるのに

空は青空。あの時と同じ青い空・・・

ふと何かがはじけるように寂しくなる

一緒に笑ってた・・・あの時間は・・・

もう戻らない、戻りたい

誰かに何かを求めてみても

どこかの風に吹かれるだけで

変わらぬ大きさと優しさに包まれていることを

青空見上げて気づいた今は・・・

空（ハハ）が笑ってる 僕も笑ってみる

空（ハハ）は青空。あの時と同じ優しい空・・・

simple smile

小細工のない
いつもの君の笑顔は
たとえつまずいて転んだって

折れたり、曲がったり、凹んだり、
決してしない強さがある

体全部で泣いてる君の
奥で待ってるシンプル・スマイル
また、元気になったらスルスルと
凸凹道を進んで行ってもらいたい

— がんばれ！ —

その笑顔には
気持ちの温度があって
向けられた僕は暖かくなる

強烈な、第一印象や、派手さも、
確かにないけど暖かくなるんだ

うつむいて黙ってる僕の
横で見つめるシンプル・スマイル
わき上がった元気がミヤクミヤクと
体中を駆けめぐって立ち上がる

— がんばろ！ —

悲しい後に、君はsimple smile

僕にもくれる君のsimple smile

咲いた！

笑って、笑って、また笑って
何がそんなに可笑しい？

首をかしげて見つめ合った瞬間に
咲いた！

ドキドキ、ときどき、ワクワク

最後の一撃が胸を突いたら
あふれ出した 愛してるの言葉

雨風に、揺られて濡れて、また綺麗になった

回って、回って、グルグル回って
離さないで絶対
堅く繋いだ手から行ったり来たりの温度が
増した！

ルルルツ、ハナウタ、ニッポンのウタ

長い冬に眠っていた気持ち
突き上げるように席をたつ

今すぐに、触って感じて、そう綺麗になる？
これから何年も

雨風に、揺られて濡れて、綺麗になろう

なにもかもが・・・春

今宵雲行き怪しくて
おそろく始まる初雪便り
誰かの噂で準備した
厚着の上着がまだ重い

湯気煙り大正ロマン
意味のない火の用心
まだ来ないかと待ちわびて
すする汗ほど暖かい

これから始まる冬の夜に
君の姿が目に映る

小走り君の吐く息が
また煙のように流れてる

ああ、春気分
ただそれだけで、春になる
暖かい、暖かい、春の日の
穏やかな気持ちちが春のよう

走った君は夏までいくか？
凍えた冬で待っていた僕も
つないだ手からは春の温度
もう、
なにもかもが・・・春模様

がんばれ！そして、ありがとう

「大丈夫だったんだ」

三階の窓から 君を見ている
夕べの電話 「俺、辞める」って
でも続けるんだ？
これからもやるんだ！

ありがとう
なんだか嬉しいから言うね
がんばれ
負けんな あんな事ぐらいで

“それにしても下手だなあ”

ボールボーイ でもいいじゃない
雨上がりのグラウンド 覗く太陽
汚れたシャツは私が洗ってあげるから

がんばれ！
ちよっとは格好いいよ
そして、ありがとう
誰も言わないから言っておあげる

ホントにありがとう・・・
負けんな あんな事ぐらいで

幸せのリズム

色々難しく考えたなら
悲しくて 悲しくて 夜も眠れなくて
心配なんてするもんじゃない
うまくいく うまくいく
そうゆう風にできている

手拍子にはじかれて
歩く速さもドンドン早くなる

ららら
心で流れる歌も今日は最高にグッド
昨日からの追い風に乗って熱くなる
遠くで誰かが奏でる幸せなリズム
口笛拭いて家に帰ろう

色々大変なこと考えたなら
泣きたくて 逃げたくて 笑ってもいられない
もう全部忘れてしまおう
いつか来る きっと来る
そうゆう風に出てくる

探している幸せはピンボールのように
弾かれながら突然やってくる

ららら
考え方次第ではそれなりにグッド
夢見る子供に重ねながら
遠くで誰かが奏でる幸せなリズム
そんなピアノののって家に帰ろう

ここから先へ

今自分が立っている現在地
真っ赤に示された地図の上
右と左をキョロキョロしながら
注意深く進んでいくのか？

(これまでみたいに)

開いた扉の向こうの世界
真っ白で何も無いように見える
プカプカと浮かんでいるようで
振り返っては過去ばかり羨んでいる

ここから先へ
その一步一步に色を足して
眩しかった過去の日々を塗り変える

そのためのスピードとパワーを！
笑うことを忘れない毎日を！

ここに来るまで歩んできた道
途中で集めたひとつひとつ
大切な時間の中で少しずつ広げては
その上に足して新しくすればいい

ここから先へ
その為の瞬間全部に気持ちを乗せて
一番きれいな明日を創り 笑えるように

これから始まる僕のストーリー
これからつながる今の気持ち

さあ、ここから先へ！

Big Sun

僕を見て もっと見て

目の前にいる僕の言葉を聞いて
確かに動いてる僕の心臓を感じて

上塗りされてきたイメージや印象を
造り上げられた一方的な背景を

全部白紙に戻して、さあ
僕を見て、聞いて、感じて

手をつなごう。

同じ笑顔で大空を仰ごう
でっかい太陽に挨拶すれば

きっとまだやり直しが効くはず

君を見よう もっと見よう

目の前にいる君の温度を感じよう
何かに繋がる感情を分かち合おう

隠し通されてきた過去の矛盾や絶望も
ねじ曲げられた都合の良い真実も

全部さらけ出して、そう
君を見よう、感じよう、分かち合おう

話をしよう。

同じ空間で歴史を語ろう
でっかい太陽に瞬きすれば

きっとこれからが見えてくるはず

Under the BIG SUN

ここで生きよう

一番大切な「これから」のために
手をつなごう

夕暮れサンバ

輝く橙の空と群青の海

シズカナスナハマ

黙って君が飛び跳ねたなら

マラカスノリズム

哀しい歌をサンバに乗せて口ずさむ

かすれた高音を君が補い 二人見つめ

僕らはいつまでもキスをした

温もりを分け合い抱きしめた

ユウグレノシズカナ サンバガナガレテル

湿った空気を流す弱い風

ロクガツノカオリ

君の肩越しに見える景色

イチニチノオワリ

寄せて返す波に合わせて少し揺れた

両腕の中で君が話し そっと頷き

僕らはまた強く抱きしめあった

いつまでもそこに居たいと願った

ツツムヨウニシズカナ サンバガナガレテル